康暦元年(1379)回禄以前の東寺西院小子房について

ABOUT TO-JI SYOUSHIBOU BEFORE THE FIRE IN 1379

北脇翔平*

Syouhei KITAWAKI

The priests' living quarters performed a variety of functions as a place of the religious and secular activity of the temple. *To-ji Syoushibou* was one of the medieval priests' living quarters, you can know about the use of. The use of *To-ji Syoushibou* was summarized in following three. The first was the meeting place such as education and researches or management of the temple, the second was the place of the religious activities to be related to an offering to the temple, and the last was the make the ancillary rituals in events such as *Haido* (ceremonious visit to *To-ji* Temple by *Choja*(head priest of *To-ji* Temple)) or the *Kechien kanjo* (Dharma transmission). In addition, the plan of *To-ji Syoushibou*, public service room, private room, cooking chamber in which are arranged, is characterized in that these various rooms have been aggregated into one building.

Keywords: *Soubou (priests' living quarters), medieval era, To-ji Temple, Sai-in, Syoushibou*

僧房, 中世, 東寺, 西院, 小子房

1 初めに

東寺は初め平安京内に寺域を占める官寺として建立されたが、下って空海に与えられ、真言密教寺院として伽藍が整えられた。現在に至るまで真言密教を修する寺院であることに加え、毎月の縁日に見られるように、東寺は祖師空海個人への信仰の拠点でもある。空海への信仰を端的に示す法会が御影供であり、中でも西院大師堂(御影堂)において毎月修される西院御影供は、延応2年(1240)に始行されてより広く京の住人の信仰対象になったことが知られる。

西院は東寺伽藍の西北隅の一角を占め、西院大師堂を中心とした建物群によって構成されている。本稿で考察対象とする西院小子房は中世に存在した西院建物群の内の一つである。先行研究において、西院小子房を取り上げた詳細な研究はない状況にある。

本稿では、最初に東寺西院の沿革について述べ、西院小子房に関する指図史料を紹介して、その沿革に分け入る。次章にて14世紀における西院小子房の空間構成について、文献史料と照合しつつ考察する。更に章を分けて西院小子房の諸機能について整理し、結章にてその空間的特徴について住宅史的な観点を中心に考察し、課題について言及する。

2 東寺西院の沿革と西院小子房

2-1 東寺西院の創建

西院の創建については正確な時期を記す史料を欠く。鈴木亘氏は東寺最初具支灌頂記(弘法大師諸弟子全集巻上)の記述を引き、承

和10年(843)以前の建立とする¹⁾。「西院」の名称は永祚元年(989)円融院御灌頂記(大日本史料第2編の2、以下『大日本史料』2-2と表記)に見える。東宝記第三仏宝下に引用される長治2年(1105)の目録では、西院内の建築として、五間四面大師御坊、四間三面僧房、四足門、七間二面供所屋、五間同西妻庇、三間同廊が挙げられている。治承3年(1179)東寺損色検注帳²⁾によると西院に五間四面大師御所、九間三面板葺長屋といった建物、また七間二面供所、五間三面阿闍梨房が見られる。上記の西院にまつわる史料には小子房の名は現れない。

ところで一般に知られることであるが、小子房という名称は古代寺院の伽藍僧房にて僧房に對面して設けられる付属屋を指す。先行研究によれば、東寺の伽藍も三面僧房を有しており、講堂の東北西三面を囲み、大房と小子房が向き合う構成であったとされる³⁾。先行研究のうち大岡実氏が三面僧房の規模の根拠としているのは、天保3(1832)年の年記をもつ伽藍指図である。また、室町時代の成立とされる京都国立博物館蔵の阿刀家旧蔵の東寺伽藍指図にも講堂を取り囲む三面僧房の礎石を記す。これら指図に記される三面僧房の西端は、西院の築地東端から大きく外れて両者は重ならない。中世に至り前記の三面僧房は退転しており⁴⁾、先行研究における三面僧房の小子房と以下の論で述べる西院小子房が別建物であることは明らかである。以下各節では別記なき限り、西院小子房を小子房と称することにする。

* (公財)文化財建造物保存技術協会

The Japanese Association for Conservation of Architectural Monuments

2-2 西院小子房の沿革

西院の信仰活動上の画期に目を転じると、13 世紀中期延応 2 年（1240）に大師堂北面に弘法大師像が安置され、供僧を止住せしめての長日生身供が始行されるという注目すべき変化がある。長日生身供の始行の法会について詳述する延応御影供始行事⁵⁾には「新供僧五口可居住西院御僧坊、々々等末調之間、先各退出ス」「自其開白三上人令北僧坊居住、次二人門指止住云々」とあり、供僧の止住する僧房が未だ建立されず、北僧房のみがある事が知られる。

小子房の名は、仏舎利勘計記宝治 2 年（1248）条（『大日本史料』5-26）に、御室の使者を招いて仏舎利勘計を行う際の休息所として見える。仏舎利勘計は建保 4 年（1216）以後東寺で行われるようになり、延応元年（1240）以後は西院御影堂で行われていた⁶⁾。

仏舎利勘計記宝治 2 年条では二つの指図が伝えられており、一つは「宝治図」（以下『宝治図』）、もう一つが「此図不注年記」（以下『不注年記図』と略）と題される。『宝治図』と『不注年記図』を比較すると、両者とも三間四方の範囲を記述し、柱、壁、妻戸や遣戸の配置が共通するが、東面の格子や方位記述の有無など細かい相違点がある。舗設の内容を見ると、『宝治図』が御室の座を西北隅柱に寄せて設けるのに対し、『不注年記図』では、御室と准後の座が隅を避けて設ける等の相違点がある。宝治 2 年の仏舎利勘計では准后が東寺を訪れたことはなく、従って『不注年記図』はそもそも宝治 2 年の儀式の指図とは考え難い。橋本初子氏の仏舎利勘計についての網羅的研究によれば、御室と准后が仏舎利勘計に参列する例は、文永 8 年（1271）と弘安 2 年（1279）に見える⁷⁾。『不注年記図』が実例に典拠したものと仮定すれば、前記の両度のいずれかに充てられるだろう。仮説を積み上げながらの考察であるが、『不注年記図』は、『宝治図』と同一建物の同部分の指図で異なる由来

を持ち、後世の編集時に併記せられたとの考えが自然と思われる。考察に基づき、以後の本論では、より詳細な記述をもつ『宝治図』を用いて話を進めたい。

続いて仏舎利勘計記の両指図の描写が小子房全体を記すかどうかにつき考察する。建長元年（1249）東寺長者拝堂記（『大日本史料』5-29）において、威儀師従儀師の座が「小進房北母屋」に設けられ、威儀師従儀師の従僧は「著西庇」いたとある。仮に「北母屋」を『宝治図』北西の四間に重なるものと仮定したとしても、従僧の着座した「西庇」の位置を『宝治図』の範囲のみでは説明できない。従って『宝治図』の範囲は小子房と称する建物の一部を記していると考えるべきであろう。

『宝治図』の描写を詳しく見る。柱間装置は、東面は南端を妻戸とし、妻戸の北二間に格子を納める。南面と西面南端は建具を入れず開放にする。西面の北二間及び北面の西二間は壁にする。北面の東端は遣戸を納める。柱間装置から考えると、東南二面を庇に扱い、北西の四間を母屋に充てたものであろう。記事に「御室御休息所小子坊乾角南北行」とあり、記事と指図の一致が確認できる。

14 世紀以降に入ると、小子房は史料に多く現れるようになる。山岸常人氏が紹介した中世東寺伽藍の様子を示す指図史料として、醍醐寺聖教第 472 函 9 号と同函 189 号がある⁸⁾。これは東寺長者拝堂に関して制作された指図で、前者が後者の模写であるとされ、成立年代は東宝記の記事や他の指図との比較から、徳治 3 年（1308）より下ると考えられる⁹⁾。醍醐寺聖教中には、これらの他に東寺西院を表した指図として、醍醐寺聖教 472 函 18 号及び同函 24 号がある。この二つの指図は、元来同一と考えられ、南北に繋げると西院全体の建築的構成を表すもので、各建物名や建物規模や柱間装置の記述など表現方法が醍醐寺聖教 472 函 9 号の指図と同一でありながら、小子房東面の妻戸が同函 24 号のみに明確に描かれているなど、同函 9 号と比べ、これらの指図では図の表現が明確で、書込みの意味も通っている。これを踏まえれば、醍醐寺聖教 472 函 18 号及び同函 24 号は、同函 9 号と由来を一にする指図で、先行研究によって同函 9 号より古い写しとされる同函 189 号の東寺拝堂図の、失われた伽藍北西部につながるものと考えられる。以下、醍醐寺聖教第 472 函 18 号及び同函 24 号の指図を一つとし、『醍醐本』と略記する。

『醍醐本』に記される小子房の平面は、東西十間、南北三間である。これは東宝記第三に、「十間小子房一字（加東庇一間、定檜皮葺、卯西屋）」（史料中の小字による注記を〈〉にて記す。以下同じ）と記されるのと合致しており、桁行九間、梁間三間に東に一間庇の付属した平面と考えられる。柱間装置について見ると、全体的な特徴として二点挙げられる。一つは東面と南面は格子が入り比較的開放的な一方、西面と北面が比較的閉鎖的になっていることで、もう一つは三間の梁間を南の二間と北の一間で分かれている所である。前者の特徴は仏舎利勘計記と共通しているが、後者の特徴は空間構成の点で明らかに異なるものといえ¹⁰⁾、仏舎利勘計記「不注年記図」と『醍醐本』の間、13 世紀末における大規模な改変が想定される。

『醍醐本』に記される小子房の年代の下限は東宝記の記述との合致を考えれば、康暦元年（1379）の東寺西院の回祿で、大師堂とその他僧房とともに焼失するまで存在したと考えられる¹¹⁾。康暦以後の小子房再建の時期については、東宝記に応永 2 年（1395）の立柱

図 1 仏舎利勘計記指図（上は『大日本史料』5-26 所載、下は翻刻）（下右）宝治図（下左）不注年記図

と記されるが、永徳2年（1382）の造営方算用状（教王護国寺文書 606）には「三百六十文 公人中小子坊ニテ酒」とあり、永徳2年時点においてある程度内部が利用できる状況であることが知られる。

図 2 醍醐寺聖教第 472 函 18 号及び同函 24 号（上図は原本影印、下図は原本より大師堂と小子房部分を抜出翻刻）

更に至徳元年（1384）の造営方算用状（教王護国寺文書 620）に「三百三十文 同廿三日小子坊北向縁番匠手間」、嘉慶2年（1388）2月造営方算用状（教王護国寺文書 644）には「佛事料足方返弁分〈先年小子坊檜皮料口〉」とあるため、造作や屋根工事が段階的に進んでいたようで、応永2年の立柱は竣工の時期と取るべきであろう。再建された小子房は、度々屋根等の小修理を受けながら大きな変化なく存続したと思われる。この時期の状況を示す指図として、京都国立博物館蔵の東寺伽藍指図がある。この作成時期については、文明18年（1486）以前とされる¹²⁾。指図の特徴として小子房の位置と規模が回祿前と大きく異なることが挙げられる。小子房は明徳元年（1390）に再建・拡張された大師堂の北面庇東端から突出する中門に接続するように建つ東西棟の建物で、規模は桁行7間、梁間3間を数えるが柱間が少ないだけでなく、柱間1間が短く、間数以上に平面規模は狭い。柱間装置は東面の妻戸を除いて注記を欠き不明であるが、桁行方向に北1間分と南2間分に分ける間仕切りがあることは確かと思われる。

図 3 京都国立博物館蔵東寺伽藍指図（大師堂と小子房部分を抜出翻刻）

再建された小子房は応仁・文明の乱に始まる混乱のなかで記録に現れなくなり、近世の指図には描かれていないため¹³⁾、戦国期に退転したと考えられる。なお、東寺には現在金堂の西方に小子房という建物があるが、これは昭和9年に建設されたもので¹⁴⁾、以前の建物を踏襲したものではない。

3 西院小子房平面の考察

康暦元年（1379）に回祿した小子房の平面について、指図と文書を参照しながら考察する。対象とする小子房の指図はすでに前節において言及したが、全体像が知られる『醍醐本』を用いる。文書史料は建武元年東寺塔供養記（群書類従家部巻第 433）に建武元年

(1333)に催された塔供養の際、後醍醐天皇の行幸御所として使用した舗設が記されている。以下でこの記述から『醍醐本』の小子房の空間構成について考察する。まず当該部分を以下に引用する。

以小子坊為常所、其儀、(A)南面格子間五ヶ間并東面妻戸格子間垂翠簾、同東北敷庇南面遣戸上覆翠簾、(B)良角二間所、東面妻戸間并北面格子間二間懸翠簾卷之、(C)東面客宇四間所西北間立廻御屏風、傍西逼北、敷大文高麗帖二枚東西行、為御座、同南東北三間傍端敷廻小文高麗帖四枚、其間敷滿差筵、(D)西一間所立廻御屏風、敷大文二帖東西行、為御覆所、其前三間所杳形、南西北敷廻小文四帖、(E)同西六間所、南北相對敷紫端帖六枚、(F)良角二間所敷小文四帖東西行、同西一間所敷紫端二帖(G)御厨子所、黃端帖少々敷之、以上御簾帖供僧等新調之、

傍線及び(A)～(G)の記号は、説明の便を図るため、筆者の加筆によるものである。記述は大きく二つに分けられ、下線(A)(B)が御簾の扱い、(C)～(G)が畳と屏風の扱いについて記されている。さらに各々括りの中で南面及び東面→良角→(御厨子所)の順になる。以下、順に説明する。

(A)と(C)(D)(E)は、東面及び南面の舗設について述べている。(A)東面の二間が葎と妻戸から成る点、南面に葎が並ぶ点、東面に差出した庇南面に遣戸を納める点は、『醍醐本』と共通する。但し、「南面格子間五ヶ間」は『醍醐本』と比べると、『醍醐本』の小子房南面には葎が六間入っており、双方の記述が符合しない。(C)(D)(E)は東面から西面に向かって座の配置を記述する。『醍醐本』の東面の妻戸・格子の西側は二間四方の四間で区切られ、(C)にある「東面客宇四間」に符合する。その装束は、西北隅を御座とし、周りの三間に畳を敷回す。(D)の「西一間所」については、「東面客宇」の西と考えるのが適当である。『醍醐本』では、東端の四間の西隣は北側一間を区切り、南は三間が鉤状に連なる。鉤状の三間は、(D)後半部「其前三間所杳形」に符合する。「西一間所」の装束は「為御覆所」とあるが、御覆所では意味が通らず、一間という小さな空間であることを考えれば「御寝所」の誤りと考えられる。(C)(D)のつながりを広げると、(E)の「同西六間所」は「其前三間所杳形」の西側と考えられるものの、『醍醐本』では該当箇所は六間の広がりをもっており、両者の記述が符合せず、不明である。

(B)及び(F)の「良角二間所」は「良角」であるから、建物東北端にあたると考えられる。(F)の記述を見れば、「良角二間所」に「同西一間所」が続いて述べられる一方、『醍醐本』では「東面客宇」北側の三間の西には一間の空間が接している点は共通しており、位置関係については恐らく両者が対応しているとみられる。但し『醍醐本』において東北端の区画は三間の広がりをもっており、両者の記述が符合しないため、装束の詳細については不明である。

最後に記述される(G)「御厨子所」は、最初に言及される「東面客宇」から空間的な点でも離れていると考えるのが自然であり、また機能的に類似している点を想定すると、『醍醐本』の建物西端「大師生身供調進所」に充てるのが妥当と思われる。

以上の記述より明らかになる、小子房の空間構成についてまとめる。建物は北側梁間一間の空間と南側の梁間二間の空間に分かれ、南側が表向きにあたる。表向きの東端一間分は庇にあたり、妻戸と格子で母屋と隔てられ、南側は遣戸を挟んで濡縁と接する。東庇に接して四間の客宇があり、客宇西側に一間の御寝所と鉤状の三間が続く。客宇廻りの外部境の柱間装置は格子と妻戸で、客宇廻りが最も改まった空間である

ことを示している。長者拝堂図とされる¹⁵⁾『醍醐本』において小子房の柱間装置が踏襲されていることを踏まえると、小子房における舗設は、貴人を迎えるためになされる仮設的なものでなく、柱間装置などの入った固定的なものと考えるのが適当と思われる。

以上の考察による知見を図上にまとめると、図4の通りとなる。こうした空間構成が、住宅史的な観点からいかなる着眼点を提供するかについて述べる前に、小子房の機能について整理しておきたい。

図4 建武元年東寺塔供養記にみる小子房の舗設(図2に重ね書き)

4 西院小子房の役割と機能

僧侶の寺院における活動は、世俗的なものと宗教的なものに分かれる。世俗的な活動はともかく、宗教的活動については、長日行法の勤修などに関わる日常的なものと修法や灌頂など非日常的なものがあるだろう。そうした観点から小子房の機能を下の3つに整理して以下に述べる。

1. 世俗的な活動の場
2. 僧団に關係する日常的な信仰活動の場
3. 寺内行事に伴う付帶的儀禮の場

それぞれを以下において順に説明する。

4-1 世俗的な活動の場

僧侶の日常的な活動として自然に考えられるのは世俗的なものであろう。小子房について世俗的な生活を示すものとして、僧房に対して出された禁制がある。延文3年(1358)の東寺僧坊法式置文案(東寺百合文書ほ函39号、以下『百合』ほ-39と表記)には西院内僧坊及び外院と呼ばれた寺辺の僧坊での禁制が出されている。禁制は三箇条からなり、第一条に囲基双六の禁止、二条に女人禁制、三条に飲酒の禁止が謳われている。各条結語に着目すると、一条が「於内院外院僧坊者、堅可禁制之」(傍線筆者、以下同)二条が「於西院小子坊并僧坊并聖僧坊者、向後堅可守此記、」三条が「於西院小子坊者、一切可停止之、於同院西僧坊并聖僧坊者可許秘用之儀、次外院僧坊者、一向停止還而非无斟酌、」となっている。禁制対象として扱われる建物の順が文中各条で揃えてあると考えれば、西院小子坊→西僧坊→聖僧坊→外院僧坊の順に階層化しており、前者に近いほどより厳しい禁制が敷かれていることが伺われる。小子房は西院内の他僧房と一括で禁制を受けているので、僧房と認識されていたことはいうまでもない。また、小子房が厳しい禁制を課されていることは、小子房が西院北面の本尊である弘法大師像により近接した空間であることを示すとともに、僧侶が止住する空間から距離があることが伺われ、興味深い。

この他僧房での世俗的な営みが伺われるものに、僧団における評

定の引付がある。引付の多くには評定の日時とともに評定の場を記しており、その中に小子房を見つけることができる¹⁶⁾。

日常的に行われる活動だが、信仰に深く関係するものとして、經典類の書写に言及しておくべきであろう。東寺観智院金剛藏聖教の奥書には書写した場所を記すものが少なくないが、貞和2年(1346)の奥付を持つ理趣尺間書卷四¹⁷⁾に「於東寺西院小子坊」とあり、小子房で書写を行ったと知られる。

4-2 僧団に関する日常的な信仰活動の場

東寺西院では、延応2年(1240)に北面に弘法大師像を安置するとともに、この弘法大師像に毎日食物を調進する長日生身供を始行したが、生身供に供する食物を調える場所が小子房にあった。前章で示した指図『醍醐本』(図2参照)における小子房西南端の三間×二間の空間に、「大師生身供調進所」と記されており、北側中央間の間仕切に寄せて「スヒツ」と記された囲み枠線がある。「スヒツ」は炭櫃に当てられ、ここで供物を煮炊きし、宝前に運んだと考えられる。

さらに西院の本尊である弘法大師像に食物を調える機能から派生して、宗教的な活動に発展したと考えられる。正応3年(1290)1月の年記をもつ権少僧都行誉請文案(『百合』ホ-6)に次のようにある。

就中僧正存見之時、年貢之外恒例雑物等供僧中候、猶預所得分雑物等到来之時、於西院小子坊、諸集供僧并寺住之僧侶、年々来々供之、是併興隆之志、懇切之、

供僧中が預所得分として得た雑物が寺に収納された時に、小子房において供養がなされたことがわかるが、「供之」の具体的内容についてこの文書では明らかでない。

小子房において寺への収納物に関わる宗教的な活動について大黒天に関係したものが挙げられる。大黒天像については貞和4年(1348)学衆方下評定引付(『百合』ム-20)に「可奉造立」とある。所記の像が果たして造立されたかは明らかでないが、康暦元年の西院の回禄に際して「不動像御作御影以下、小子坊大黒像、兼一切経文車等悉奉取出」とある¹⁸⁾ので、大黒天像が小子房に祀られていたことが知られる。大黒天は元来戦闘神であったが福神の性格を帯びるようになったとされ、平安末期の成立とされる大黒天神法によれば、伽藍に祀り、日々供養すれば千人の僧を養う功德があると説く¹⁹⁾。また延暦寺政所や東大寺食堂に大黒天像が安置されたことが知られており、僧侶の日々の糧食に直結した信仰の場として小子房との類似性を指摘できるのではないだろうか。

上記の知見をまとめると、小子房における日常的な信仰活動の特色として寺にもたらされる財への供養との深い関係があり、その特徴は大師堂北面弘法大師像への供物調進から発展したと考えられる。

4-3 寺内行事に伴う付带的儀礼の場

寺内の重大な儀礼において小子房が果たす役割は3点にまとめることができる。一つは新任の長者が伽藍諸堂を巡回し礼拝する儀礼である長者拝堂における役割、一つは真言道場として不可欠な重儀である結縁灌頂における役割、そして天皇・院の臨幸を初めとする高位の人物の滞在における役割である。

最初に長者拝堂における小子房の役割について史料から詳しい状況を見る。史料の記述をまとめると上表1の通りとなる。建長元年(1249)の長者宣厳拝堂において、「布施祿物誦経物、納長櫃遷西院(少進房)」、また「威儀僧(中略)已上各着鈍色装束五帖袈裟、

先陣入東寺北門、参西院、入平門(不入四足)、休息小進房北母屋」として惣在庁の威儀師・従儀師が先に参り、入寺する長者を待つ場所

表 1 長者拝堂における小子房の役割

時期	長者	出典	
建長元年(1249)3月6日	宣厳	東寺長者拝堂記	布施祿物誦経物の送り先威儀師・従儀師の控え所
嘉暦元年(1326)3月16日	道意	東寺長者補任	長者が寺家に焼飯を賜う
元徳2年(1330)11月11日	経厳	東寺長者補任	長者が入寺の後、最初に入る
元弘2年(1332)12月13日	益守	東寺長者補任	長者が諸堂拝堂後、最後に入る
康永4年(1345)3月20日	栄海	栄海僧正拝堂并御影供記	威儀師・従儀師の控え所 長者が入寺の後、最初に入る

として現れる。宣厳の拝堂では長者自身は小子房に入ることはない。

時代が下り元徳2年(1330)の長者経厳の拝堂では、宿所を出た長者の進路について「大宮ヨリ至賀門、任例着小子坊、作法如常、」とある。拝堂を遂げる長者の行列が東寺伽藍の東辺を通る大宮大路を通過して伽藍東北端の慶賀門より伽藍に入り、伽藍の北辺を抜けて最初に小子房に入っている。「任例」とあることから、この時期にすでに長者が小子房に入る先例があったと知られる。また、康永4年(1345)長者栄海の拝堂では、「威儀僧二人先向小子房相待長者参」た後、長者が西院に至り「扈從相共小子房」とあり、威儀僧の控え所としても依然使われたと考えられる。

次に東寺結縁灌頂について検討する。東寺結縁灌頂は永久元年(1113)に公請化され、以後朝廷が上卿・参議・弁を定めて日時定、僧名定を行い、綱所による請定を経て色衆が決定する²⁰⁾。この過程で綱所の威儀師・従儀師から大阿闍梨たる長者が請書を受ける儀式が行われる。請書の受渡しが行われる場については二通りある。正治2年(1201)の東寺結縁灌頂は大阿闍梨を長者仁隆が務めたが、この時の請書の受請は長者の住房であった仁和寺上乘院においてなされた。その記録²¹⁾に「近例皆当日於西院有此事、而兼日尤可受之由有 御室之仰、仍今日所持参也」とあり、西院において受請の儀式が行われていたことが知られるが、西院内のどの場所で行われたかは不明である。

仁和寺上乘院の「二棟廊客亭」において行われた受請の儀については前記の記録に残されており、それに基づき儀式の鋪設を知ることが出来る。上乘院の建物は東礼して建つ寝殿に子午棟の造合を隔てて東二棟廊が繋がり、二棟廊の東南端から車寄廊が延びる構成をとる²²⁾。受請は、二棟廊の客亭に宛てられた東南の二間に長者の座を設けて行われ、南へ繋がる車寄廊に威儀師・従儀師の座を設けて饗を据えている。

請書の受け渡しは小子房において行われることは、東寺長者補任の乾元元年(1302)の記事に見られる。長者厳家は自坊で受請を行ったが、記者の付記にて、受請の儀が「於本寺被行之時者、於西院山子房東四間在之、長者有着座、賜祿物云々、」とされる。山子房は小子房の誤りであり、小子房で受請が行われたと考えられる。長者の着座や賜祿は、元徳元年(1329)のように着座がない例もあるとはいえ、前記の仁和寺上乘院での儀式との類似性を考えれば、小子房の空間構成を考えるうえで注目すべき事柄であろう。

最後に、高位の人物の滞在における役割について記す。天皇・院が小子房に滞在した例を次頁表2にまとめた。14世紀を通じて滞在例がみられることがわかる。建武元年の後醍醐天皇による行幸は前

章の平面に関する考察において触れた。表2のうち最も早い、徳治3年(1308)の後宇多法皇の臨幸については、翌延慶2年に供僧中

表2 天皇・院の小子房滞在例

時期	人物	史料名	出典
徳治3年(1308)	後宇多法皇	東寺供僧申状案	教王護国寺文書224
元弘3年(1333)6月4日	後醍醐天皇	新葉和歌集	大日本史料第6編
建武元年(1333)9月23日	後醍醐天皇	東寺長者補任	大日本史料第6編
延元元年(1336)6月14日	光厳上皇	東宝記第五	大日本史料第6編
文和元年(1352)閏2月19日	光厳上皇 光明上皇 崇光上皇	東宝記第五	大日本史料第6編

から寺務に宛てた、「小子房御簾事」の端裏書をもつ申状案(教王護国寺文書224)に、「去年法皇御所之御時、御座并御簾等、奉為向後、御所被預置承仕〔之候〕云々」とあり、後宇多法皇の滞在に際して小子房の御座と御簾が使用され、後々のために御所から承仕に預け置かれていることが知られる。御所の装束は行事官が行うことが通例であり²³⁾、小子房を御所とするための舗設が行われ、御簾や畳を調えたと考えられる。

高位の僧侶の休息所として小子房が用いられる例として、東寺灌頂や拝堂、灌頂院御影供がある。正中2年(1325)の東寺灌頂では、大阿闍梨が初夜作法を終え、相承袈裟や念珠などの道具を外したのち、外した道具は執行により唐櫃に収められて西院に運ばれた。執行は道具を北面妻戸間で取り出して、小子房に参上している²⁴⁾。これは後朝に再度長者が道具を着用するで、長者が初夜と後朝の間小子房で休息したのと考えられる。嘉暦3年(1328)の東寺灌頂では、相承道具の唐櫃に勅封が施されており開封できないため儀式が進まず、やむなく長者が小子房に一旦退く事態になった²⁵⁾。康永4年(1345)長者栄海の拝堂では拝堂の翌日に灌頂院御影供を行っており、栄海は拝堂後灌頂院御影供までのあいだ小子房に入り休息している²⁶⁾。

以上3点にわたり、小子房の寺内儀礼での役割を見てきたが、いずれの場合でも行事の主要部分の前後に参加者が控え、溜る空間であったという共通点をもつ。こうした機能的特徴より派生する儀礼を通じた空間的特徴に対する考察については次章で改めて述べたい。

5 おわりに

小子房のもつ空間的特徴について主に住宅史的観点から考察したい。小子房の空間構成の特徴として、最も明確に指摘できるのは食物調理機能と、接客機能と補助的な居住機能が一棟に集約されていることである。集約化の内容について以下で説明したい。

食物調理機能は小子房西側の空間に確認でき、大師堂本尊への供物を調理する具体的な調理設備を備えている。調理機能をもつ建物において、僧侶の糧食に関する信仰活動が発展したことは他寺院の例にもみられる。

小子房にみられる接客機能の特徴について、他の建物での比較が可能である請書受請の儀礼を取り上げる。小子房において受請は乾元元年の記述より「東四間」に長者が着座して行われた。「東四間」は、3章で考察した平面に基づいて位置関係を検討すると、東庇西側の四間に充てるのが自然であろう。図2及び図4を参照すれば、東面

に庇を臨み庇境に妻戸と格子を備える特徴が知られる。

一方前節において考察した、仁和寺上乘院の「二棟廊客亭」において長者が寝殿より出御し着座した二棟廊南面のうち、「車寄廊」に接続する東間には「南戸」があり²⁷⁾、戸を挟み外側に位置する車寄廊に綱所の座が設けられた。図5に表した座の位置関係をみると、二棟廊南面の互い違いに対面する二畳は、寝殿造における出居の接客空間を縮小した表現といえ、さらに車寄廊の座は長者と綱所の身分差に対応して妻戸により隔てたものと考えられる。小子房における受請の舗設は不明であるが、庇と庇境を区切る柱間装置が、接客空間を形成する上で重要な役割を果たしたことは想像に難くない。

図5 仁和寺上乘院東向諸室の構成(注(22)史料より推定)

3章で考察した後醍醐天皇の行幸御所としての舗設から、小子房の居住機能について検討したい。史料中で小子房は「常所」と呼ばれており、比較的私的な居住空間である常御所に充てて舗設せられたとみられる。川上貢氏は、寝殿の北面に常御所をあてる慣用が平安後期の六波羅泉殿寝殿などに見られ、鎌倉期にかけて仮設的な舗設から並戸などの固定的な建具によって区画されるようになるとしている²⁸⁾。常御所の具体的な例として川上氏は、門葉記所収の乾元2年(1303)今出川殿寝殿の御産御祈のための指図を挙げている。考察のなかで、南面する寝殿中央部桁行三間分の、母屋・北庇境を通る棟分戸に依り分かれる北側六間の空間について、御産所と記される二間を寝所に、残りの四間を常御所に充てている。各例を踏まえれば、小子房の場合においては、寝所を囲む鉤の三間が常御所にあてはまるだろう。

図6 今出川殿寝殿(注(23)論文所載指図影印により作成)

常御所及び寢所に連続する四間は、「客宇」と称されている。これを客亭に類する接客空間一般に用いることばと解すると、小子房の舗設では居住空間と接客空間とが接しているという特徴がある。居住空間と接して設けられる接客空間としては、寢殿造における内出居があげられる。藤田盟児氏によれば、鎌倉時代の住宅において公卿座を二棟廊の出居に固定的に設け、寢殿の庇に内出居を設ける舗設が定着するという²⁹⁾。小子房における舗設は、限定された空間で行幸御所の居住空間を舗設するにあたり、居住的性格の強い内出居に、類似した性格ながら接客を主目的とする空間を充てたものと考えられる。同一空間に複数の機能を担当させるうえで類似した機能を重ねることは、集約化の具体的状況を示すものとして注目すべきかと思われる。

2章において述べた小子房の沿革について、その成立時期及び過程が不明という問題点がある。改めてこの問題点について考察を深めたい。4章で長者拝堂における役割をとりあげた。建長元年（1249）の長者宣厳拝堂において、小子房は惣在庁の威儀師従儀師が先に控え、入寺する長者を待つ場所として用いられた。儀式に際し惣在庁の威儀師従儀師が控える例を13世紀前期以前に探ると、結縁灌頂に見ることができる。結縁灌頂において惣在庁の威儀師従儀師が控える場は大別して2つ挙げられる。一つは東廊と呼ばれ、もう一つは北屋と呼ばれる。

東宝記第三に西院大師堂の指図として、「西院根本図様」と題される図がある。大師堂の東北端に三間×二間の突出部を記し、「此廊承久三年有修理云々」とある。北院御室守覚（1150-1202）の撰による東長儀（群書類従家部巻第775）の東寺灌頂次第に、前日饗の座について「東廊東二箇間東西二行敷同帖各二枚威從座」と記し、東廊に威從即ち威儀師従儀師が控えることが知られる。

図7 東宝記第三所載西院根本図様（注（4）資料より翻刻）

北屋については、高山寺蔵の康治2年（1143）灌頂日記³⁰⁾に「淳観、行海両閣梨・威儀僧等少々留宿北屋」また「綱所々司等着北屋」とあり、威儀師やその従僧にあたる僧綱所所司が北屋に控えることが知られる。守覚の撰による仁和寺紺表紙小双紙の東寺灌頂長者作法³¹⁾に「着饗座事（中略）威從着北舎東面」とあって、この北舎も北屋と同建物と考えてよい。さらには2章で触れた治承3年（1179）東寺損色検注帳には九間三面の「北板葺長屋」がある。これは、3

章で考察した小子房の規模と同一で、小子房の前身を考えるうえで興味深い。

同じ役を果たす東廊と北屋との年代関係を示す史料として、仁隆による正治2年（1200）東寺結縁灌頂記の以下の記述がある。

東北廊母屋東二ヶ間、二行対座敷同帖四枚、為威從座（上古北頭有東西妻長屋、以此所為綱所座、件屋顛倒之後、勸修寺法務道立此廊）

「東北廊」は、東長儀との類似を考えれば東廊を指し、東廊に別して「北頭」にあるとする「東西妻長屋」は北屋のことであろう。以上を踏まえて上の記述を見れば、当初威儀師従儀師の座があった北屋の顛倒後、勸修寺法務寛信が東廊を造立したと解釈できる。

但し、この記述には他の史料と齟齬をきたす点がある。例えば、寛信は1153年没であるため、東廊の建立はそれ以前になる。しかし、約30年後になる治承3年（1179）年の損色検注帳に東廊は存在しない。各史料の錯綜した点について整理し、説得力のある見解をまとめるのはこれからの課題である。

謝辞

貴重な史料の閲覧及び掲載に許可を頂いた総本山醍醐寺に末筆ながら謝意を表します。

注

- 鈴木亘「創建期の東寺西院不動堂」『日本建築学会関東支部第43回学術研究発表会梗概集』（日本建築学会、1973）
- 平安遣文3879、なお異本が宮内庁書陵部に所蔵されており、上野勝久氏は、同庁所蔵の写本が寸法等の記述においてより正本に近いとする。（「古代・中世の東寺大師堂の建築について」『東京藝術大学美術学部紀要』47（東京藝術大学美術学部、2010））
- 浅野清「埋もれた寺院」『世界考古学大系 第4巻』（平凡社、1961）、大岡実「貞観時代における興福寺式伽藍配置」『南都七大寺の研究』（中央公論美術出版、1966）
- 東宝記第一仏宝上棟字目録、「三面僧房〈講堂砌東西北三方有之〉（中略）已上廃絶」、東宝記については続々群書類従宗教部所収の広本を参照し、『国宝東宝記 原本影印』（東京美術、1982）と照合した。
- 東寺百合文書追加之部所収。翻刻校本は橋本初子『中世東寺と弘法大師信仰』（思文閣書店、1990）所収のものを参照した。
- 橋本初子「東寺仏舎利の勘計と奉請」前掲注（5）『中世東寺と弘法大師信仰』
- 前掲橋本注（6）論文巻末「東寺仏舎利の勘計・奉請一覧表」に依った
- 山岸常人「東寺伽藍指図について」『中世寺院の僧団・法会・文書』（東京大学出版会、2006）
- 前掲山岸注（8）論文
- 『醍醐本』の指図と東宝記第三仏宝下「当時様」の指図とを西院大師堂の箇所について比較すると、「当時様」でなされる遺戸と壁の区別が『醍醐本』においてないことがわかる。従って小子房においても遺戸と壁の区別はされないものと考えられる。ただし大師堂内陣のように唐戸が置かれている箇所に柱間装置が記されない箇所もあるため、当部分に関しては全体的な特徴について言及するに留めたい。
- 東宝記第三仏宝下西院
- 前掲山岸注（8）論文
- 前掲山岸注（8）論文
- 藤田盟児「小子房・勅使門」『新東宝記：東寺の歴史と美術』（東京美術、1996）
- 前掲山岸注（8）論文
- 例えば宝莊院方評定引付文和3年（1354）11月23日条（大日本古文書家わけ第10 東寺文書の13 た函3号（東寺百合文書に函番同じ））
- 東寺観智院金剛藏聖教31箱の2 観智院金剛藏聖教の奥書については京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教目録』（京都府教育委員会、1985）を参照した
- 東寺長者補任巻四、東寺長者補任については続々群書類従史伝部所収の

広本を参照した。

- 19) 喜田貞吉「大黒神考」大島健彦編『民衆宗教史叢書 29 大黒信仰』（雄山閣、1990）所収
- 20) 上川通夫「平安後期の東寺」（『古文書研究』24、1985）、真木隆之「平安時代の東寺結縁灌頂会」（『山口大学文学会志』54、2004）
- 21) 仁隆による東寺結縁灌頂記については、仁和寺紺表紙小双紙研究会編『守覚法親王の儀礼世界：仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究』（勉誠社、1995）所収の翻刻を参照した
- 22) 「御請書（中略）其儀上乘院二棟廊客亭南面二箇間卷御簾、西間迫北障子東間迫南戸東西行式高麗端帖各一枚、其西二箇間南面両西垂御簾、車寄廊東面南第二三間〈閉北中戸不徹南障子〉、迫西間南北行敷紫端帖二枚、為威從座〈惣在廳座近例皆敷高麗端帖、今度有儀所被敷紫端之子細見右〉、午刻惣在廳威儀師俊紹公文從儀師賢慶〈各着法服赤袈裟〉参入、申案内房官慶真〈着法服平袈裟〉經車寄廊東南簀子降南〈童子此所設鼻広〉相逢即帰昇入南面妻戸、經二棟廊南西簀子入子午廊与寢殿之造合間、於同北面申事由、經本路出車寄廊西脇戸、降庭上、」
- 23) 建武元年の東寺塔供養における堂莊嚴、御所及び集会所等の装束について、寺家は「於堂莊嚴者承仕相共雖令奉仕、御所御装束以下所々座籍等、悉可為行事官沙汰、是先規也」と主張した。
- 24) 東寺長者補任卷四「僧正有助（中略）十二月廿二日拜堂、（中略）同日灌頂（中略）当寺供僧還烈之時、於護摩堂、被脱相承御袈裟念珠五古等、執行嚴伊參儲之、即於灌頂院内陳納唐櫃、後朝之時渡御唐櫃於北一間、妻戸間、内々取出之、進小子房、」
- 25) 東寺長者補任卷四「權僧正成助（中略）仏舍利乞二粒御奉請、勅使九条前中納言光經、（中略）三昧耶戒之時、金堂廻廊ニ於テ、如恒例開御道具之時、於相承御袈裟者、被付勅封畢、仍御着用難叶之由令申間、臨期違乱出来之間、自廻廊即小子坊へ令帰洛畢、其後、真光院へ被申合之後、扈從兼什法印袈裟ヲ令着用給テ、又御出仕也、仍三昧戒及日中畢、」
- 26) 統群書類從釈家部卷第 776「帰西院、於東階下脱鼻靴着草鞋入庇當間着母屋座〈座東西行向南〉、威儀僧相隨而同上階隱、以法具等置座前退去、扈從昇北面簀子相待帰入、次行吉事（中略）次予帰入經御影堂北面并渡殿入小子房、是丑初也、」
- 27) 前掲注（22）に同じ「上乘院二棟廊客亭南面二箇間卷御簾、西間迫北障子東間迫南戸東西行高麗端帖各一枚、」
- 28) 川上貢「西園寺家の今出川殿」、「結論二 中世寢殿平面の史的発展過程の考察」『日本中世住宅の研究』（墨水書房、1967 のち新訂中央公論美術出版、2002）
- 29) 藤田盟児「客亭・出居・公卿座」『鎌倉前期住宅史の研究』（私家版、1995）
- 30) 『高山寺古典籍纂集（高山寺資料叢書第 17 冊）』（東京大学出版会、1988）
- 31) 前掲注（21）『守覚法親王の儀礼世界—仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究—』

ABOUT TO-JI SYOUSHIBOU BEFORE THE FIRE IN 1379

*Syouhei KITAWAKI**

* The Japanese Association for Conservation of Architectural Monuments

The priests' living quarters performed a variety of functions as a place of the religious and secular activity of the temple. *To-ji Syoushibou* was one of the medieval priests' living quarters, you can know about the use of. The use of *To-ji Syoushibou* was summarized in following three. The first was the meeting place such as education and researches or management of the temple, the second was the place of the religious activities to be related to an offering to the temple, and the last was the make the ancillary rituals in events such as *Haido* (ceremonious visit to *To-ji* Temple by *Choja*(head priest of *To-ji* Temple)) or the *Kechien kanjo* (Dharma transmission). In addition, the plan of *To-ji Syoushibou*, public service room, private room, cooking chamber in which are arranged, is characterized in that these various rooms have been aggregated into one building.

(2014 年 6 月 10 日原稿受理, 2015 年 3 月 5 日採用決定)